



体験指導の手引書

『ねどふみ』からやる こんこん草履づくり (六合根玄流)



この『体験指導の手引書』は、2013年秋～冬にかけて中之条町入山根広地区の「ねどふみの里保存会」の方々に教わった、『スゲ刈り～ねどふみ～スゲ縄ない』までの一連の作業と、そのスゲ縄を使った、根広集落に伝わる『こんこん草履づくり』の編み方について記録したものです。

旧六合村には、根広の「ねどふみの里」の他に、世立という集落に「よつてがねえ館」という施設があり、こちらでは「ねどふみの里」の半額程度の料金で、こんこん草履の創作体験教室を行っています。著しい料金差の理由は、芯縄の材料にあります。「よつてがねえ館」の方は市販のPPロープを使っているのに対して、「ねどふみの里」の方は大変に手間のかかる『スゲ縄』を使っているからです。

現在、世に出回っている『こんこん草履の編み方』書籍は、世立の「よつてがねえ館」の編み方で記載・出版されています。それもそのはず、根広で材料として使っている『スゲ縄』は、当地の尻焼温泉に刈ったスゲを長く浸けることでできる特有のもので、根広流のこんこん草履づくりは、「ねどふみの里」にこない限りは作られません。しかし、「ねどふみの里保存会」の方々は既にかんりの高齢で、後継者も育てているとは言えず、10年後に今と同じような体験指導をしているイメージを描くことが困難な状況にあります。

そういうことを踏まえて、「ねどふみ」の“わざ”と“知恵”、「スゲ縄」を芯縄に使ったこんこん草履づくりの伝統的な“ものづくり技術”を記録しておくためと、一連の作業を多くの方に経験しておいてもらい、後世に伝えていくために、『ねどふみ』からやるこんこん草履づくり」学習会を実施いたしました。

根広と同じ『スゲ縄』は、他所では作れようもないのですが、編み方については「ねどふみの里」＝根広流を記載しています。こんこん草履は地域によっても編み方やできあがりには差異がありますので、体験指導の際には、どこ流なのかを説明すべきかと思われます。以下には、これまで「ねどふみの里保存会」の方々にインタビューして得た「ねどふみ」情報を記載します。体験指導の際にお役立てください。

-
- 昔は野反池が広大な湿地で、そこに刈りにいっていたが、野反池にあるのはみんな高山性のイワスゲで、今回刈ったスゲとは違う。
 - イワスゲはそのままでも縄なうことができるが、ねどふみした方が軟らかくなりよい縄ができる。イワスゲを使うにあたって、ねどふみする人としていない人がいた。
 - イワスゲは、旧六合村根広でそう呼ばれていたが、本当の標準和名は、違うかもしれない。たまに穂が出ている。
 - 水池にオオカサスゲというものがあるらしいが、私たちが使っているスゲや、イワスゲと同じものなのかどうかは解らない。
 - 野反池は野反湖＝国立公園となり規制が厳しくなり、刈れなくなったが、それでも昭和50年位までは刈りに行っていた。
 - 本来ならば、スゲは9月末には刈るべきだった。今回(10月14日)は2週間位遅かった。

- 今回刈った分の量は、年間で2人分が使う位の量。
- スゲの他にみょうがの葉もねどふみしている。こちらの方も肌触りが良く、人気。
- 尻焼温泉の権利を根広の一部持っていて、医療センターは、根広の温泉権利を貸している。貸す代わりに、根広は全ての家に温泉が入っている。
- 農作物を干して乾かしたい時、下がビニール（ブルーシート等）だと乾きが遅く偏るが、スゲむしろだと速く均等に乾く。

- 今、長笹沢川で尻焼温泉として湯客が入浴しているところは、昔は堤防がなかった。コンクリートも段々もなかったのので、川床は広々としていた。高低差もなく、スゲを漬ける場所は自由に行うことができた。堤防ができたために場所が狭くなり、段差のためか滝壺化し深くて行けないところもできてしまい、湯客と場所を取り合いするようになった。
- 尻焼温泉では、根広、長平、小倉の3つの部落がねどふみをした。
- 花敷温泉では引沼～和光原、世立など、入山中の部落がねどふみをした。
- 入山の人ねどふみをしたが、荷付場から下の部落ではやらなかった。
- 花敷温泉のねどふみの場所は昔の橋の下、今の露天風呂の向こう側の川岸あたりで漬けた。やがてホテルが建設され、温泉を引湯するようになったので、川床に温泉は流れなくなった。入山の人ねどふみをしなくなったが、その後もねどふみした人は、尻焼でねどふみした。
- ひと握りで掴める量を一把にし、それを10把くらいまとめて一束にし、束の単位で川に漬け、上から石を置いて川床に固定した。
- 本来は雪の舞う頃ねどふみをした。「とうかんやだから、今日はねど入れるべいや」。(十日夜は旧暦10月10日に行われた)
- 旧正月(2月初め頃)の前までにねどを仕上げた。
- 川の近くで干して乾かして、軽くしてから根広まで運んだ。
- ねどふみしたスゲはみんなムシロにした。昔は野反池の近くで採れたイワスゲを使っていた。ムシロを織る時の縦ひもには「しなの皮」や「麻の皮」をよって使った。
- こんこん草履で使う芯縄もやはりイワスゲを使っていた。しかしある時、スゲを使ってみたらイワスゲよりも丈夫で芯縄として良かった。それ以降、芯縄にはイワスゲでなく、スゲを使うようになった。羽根尾あたりには、短くてとても質の良いスゲがあり、取りに行った。場所によって長さや質が違う。
- スゲはねどふみに2週間かかるが、みょうがは1週間で仕上がる。
- 昔は用途があってムシロをずいぶん織ったが、今はめっきり織らなくなった。
- 根広では稲は作っていなかったの稲藁が無かったが、昔は米俵の空俵を買ってきちゃ解いて草鞋やこんこん草履を作った。

- 平成16年に「ねどふみの里」ができた。それ以降は、長笹沢川ではなくて、足湯で漬けている。
- 足湯は狭いが、川床のように危険がなく、楽で安全で、温度も高いまま維持できて良い材料に仕上がる。
- 川に漬けたスゲは真っ白に仕上がったが、足湯だとやや先の方の青み(緑)と根元の赤みが残る。
- 家のお風呂(尻焼温泉を引湯している)でスゲを漬けて入浴すると体が温まった。

文責 赤木道紘

■第一回（10月14日（日）） スゲ刈り



株立ちになっているスゲを根元から数株刈り取って、



先端の方を持ち、根元の方に向かって手指で払うようにして枯れているものを取り除きます。だいたい枯れたものを取り除いたら、



今度は根元の方を持って、先端の方の枯れ具合を見ます。枯れが大きいものは省いて、残ったもの（選別し終わったもの）を束にしてお腹に押しあて、根元を揃えます。



これを仮置きし積み重ねて行きます。仮置きした束が直径 10cm 程度になったところで、まとめます。先ほど選りすぐって捨てたスゲを三本位拾って括ります。



括り方は、紐にするスゲを束の真ん中に合わせて両端を一回しし、表で出会った両端をねじって挟めて止めます。



このようになります。

根広の師匠達は、鎌の刃をスゲ縄で巻いて防御していました。スゲは湿地にあるので、長靴スタイルで作業します。また、お腹の部分が汚れるので、師匠たちが被っているような、作業用のエプロンがあると良いでしょう。





束にしてまとめてあるものをいくつか合わせて、さらに大きな束にします。これをトラックに積んで持って帰る訳です。



群生している中で、当然ながら素性の良いスゲを刈り取り、残ったものは刈り払ってしまいます。そのままにしておくと来年、枯れたものが立っていて邪魔なのだそうです。また、断面がM字になるこのスゲの種類は、解りません。



今回刈ったスゲはムシロ用では無くて縄用なので、先の方を少し切ります。長すぎると帰ってなうのが大変なのだそうです。軽トラに積んで、ねどふみの里へ移動します。



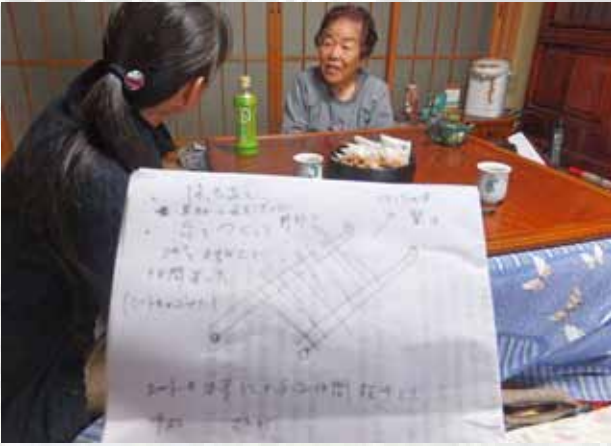
刈ったスゲは、中村義司さんの家の前で干させて
いただくことになりました。広げると足の踏み場
も無いほどです。



あのままだと、括っている根元の方が乾きませんので、晴れた日に一日干して乾いたら、ぐっと握っ
て内側をめくり出して、



束をひっくり返して、括った紐を真ん中に上げ締め直し、さらに上にもうひと括りして今度は根元の
方を乾かします。



以下は 10 日後の 10 月 24 日に中村千代子さん宅へ伺って聞いた、その後の作業内容です。

- みんなで玄関先に干した刈ったスゲを、晴れていたなので、まずは一日そのまま放置した。
- 翌日、朝から雨だったので、丸太を 2 本敷いて台をつくり、その上にスゲを並べてシートをかけ、2 日間置いた。
- 雨が上がった後、シートを外して 2 日間干した。
- 乾いたスゲを、一本ずつ選別したり、根元を持って掻きだしたりして、選り直した。
- 乾燥させたらみじゃける (バラバラになる) ものがあった。葉の先が茶色くなるのは刈るのが遅かったんだと思う。そういうものは省いたり切ったりもした。
- 縄には短い方がいいので、少々切る分には都合が良い。
- 根元を縛ってあったものを上にあげて、ふたとこまるった。中ほどで締めなおし、さらに上にもう一か所縛った。
- 小さい束はまとめたりもした。
- こうして、千代子さんが 2 日間かけてほとんどまるった。まだ一部乾ききっていないものはまるっていない。
- 乾いてまるったスゲは、ねどふみまで濡らさない様にして置いておく。丁寧に扱わないと切れてしまう。落とすのもアウト。ムシロを織る時に傷があるとそこから切れてしまう。
- ムシロは長いスゲで織る。

■第二回（11月17日（日））ねどふみとスゲ縄ない



前回刈ったスゲ束を温泉（足湯）に浸してゆきます。



次々に入れていきます。浮いてくるので足で踏んで沈めながら、どんどん入れて行きます。木の板で押し込んでさらに上に乗かって押して、



板の上に重しの石を乗せてゆきます。がっちり敷き詰めたら建築シートをかけて、シートが動かないようにその上にも重しをのせて、現代流『ねどふみ』作業は終了です。



※足湯の温泉が徐々に緑色に濁ってきました。『ねどふみ』をするとスゲからアクが出て柔らかくなる…といます。この温泉を濁らせた成分がアクということなのかも知れません。



スゲ縄ないの準備をします。予めねどふみしてあるスゲ束（例えば去年のもの）を、今日使う分だけを足湯にざっと浸けます。通常、師匠達が自分でスゲ縄ないをする前には、お湯に浸けて、こもにくるんで一晩置いているそうです。



スゲが十分に柔らかくなったらお湯からあげて、「こすり」と呼んでいる道具を作ります。スゲで縄ないをして、それを三つ折りにして、



それをさらになっていきます。まとまったら余った分を一方の網目の中に入れて通して、



邪魔な部分を切って、できあがりです。作成過程は千代子さんの画像でしたが、この「こすり」の写真は富士子さんのものです。このように、縄やスゲをまとめたものを道具として使います。



『スゲ縄ない』をします。スゲをおもむろに6～8本とって、先端の方を20～30cm出して足の指に挟んで掴み、根元を二手に分けて縄ないします。



しっかりした良いスゲなら3本、弱そうなスゲなら4本をひとまとめにして、なっています。



根元まで縄ないしたら、絡んだ縄の先の方を掴んで逆まわしする「捻り戻し」をして、縄の絡みをを強めます。絡みがしっかり強まったら、根元と足の指で掴んでいる先のほうを軽く張り、「こすり」を縄に当てて上下にこすります。こするとささくれだって飛び出る部分が出ますから、それをハサミで切ります。



しっかり絡みができているなら、根元の端から3cm位のところで玉結びをします。



足の指で挟んでいた先の方を外し、今結んだ根元を挟みます。結び目を足指にひっかける感じで。



今度は先の方をなっていくます。スゲは先が細くなるので、さっきまでなった根元部分と比べると、頼りない感じがもう、あるはず。先の方をなう最初から新しいスゲを足して、片方3～4本の厚みをキープしつつスゲ縄をなっていくます。



スゲが細くなってきたら、すかさずスゲを足してまたなう、この繰り返しです。千代子さんの場合は、足してから4～5回は素早くなって、そこからなうスピードを落とし、外側に少ない方のスゲが来た時に手を止めてスゲを継ぎ足していきます。



このように、スゲを足す時は必ず外側（自分から遠い方）で足します。ある程度なったら、縄を自分の方に捻る「捻り戻し」をして絡みを強くさせます。



捻り戻しをした後は、かならず「こすり」をかけます。



こすった後に出るささくれは、ハサミで切って綺麗にします。これを切ること六合では「へぞる」というそうです。ささくれがあると（こんこん草履づくりの際に）芯縄を引っ張る時にうまく行かない時があるのです。この作業を延々と繰り返して、長いスゲ縄ができあがります。こんこん草履を一足作るには、だいたい3メートルのスゲ縄が必要だそうです。

なっていくと必然的に縄が長くなってきて、縄を掴んでいる足（指）が遠くなっていきます。そうすると作業がしにくくなるので、こすりをかけ、仕上がったらその場所を足指で挟み替えて、あまり長すぎない、程良い長さで常になえるようにします。



縄ないを初めて体験した筆者の感想としては、スゲは稲藁よりもない易いのではないかと思いました。しっかりしていて長いし、何よりも稲藁をいじった時のように大量の細かいゴミが出ません。左が千代子師匠の作品、

右が筆者のものです。細くて均一でしっかりしているのが良いスゲ縄です。

■第三回（12月1日（日））ねどあげとこんこん草履編み
（12月8日（日））こんこん草履編みと藁たたき



前回「ねどふみ」したスゲが半分になっているのは、今日の講習会で私たちがこんこん草履で使う芯縄をなうために「ねどあげ」しておいてくれたからです。シートをはぐと、ぷ〜んと納豆のような匂いが漂いました。



横にずらして、ほぐします。かつては、尻焼温泉、花敷温泉などの長笹沢川川床の温泉湧出地点で行われていた「ねどあげ」の作業風景は、平成16年『ねどふみの里』ができてからはここの『足湯』で行われています。



次々に引き上げます。みんなで「ねどあげ」を共同作業します。みんなでやる、日本の原風景です。



「ねどあげ」したら、一輪車に乗せて運び、「スゲ干し」作業です。今日は近くのガードレールに。並べてかけて、風で飛ばされないように紐でくくります。



旧六合村根広では、今も昔も、農作業のない冬の間はずっと、奥様の家での仕事はわら細工、すげ細工になるわけですから、今日ねどあげした量では足りません。あげたら、すぐに次のスゲ束をねどふみします。

この過程は前回と同じです。乾燥させたスゲ束を温泉（足湯）に浸して（浮いてくるので足で踏んで沈めながら）、木の板で押し込んでさらに上に乗って押して、板の上に重石を乗せて敷き詰めたら建築シートをかけて、その上にも重しをのせて、最後にもう一回建築シート&重石を乗せて「ねどふみ」の完成です。



富士子巨匠の「編みワラ」のづくり方。

1. ワラを2～3本持ち、根元の方を揃える。
2. ワラとワラの上に布を挟み、くるくる巻く。
3. 途中、あまりにも細くなるようだったらワラを1本足す。
4. 根元の方を足指で挟み、先の方は両手を使って巻いていく（こうした方がしっかり巻ける）。
5. 巻いていくと足と手の距離が遠くなっていくので、足指で挟む場所を先の方に移動させていく。
6. 途中、ワラの葉が多いと部分的に膨れてしまうので、不必要な葉は取る。



先端まで巻いたら、通常は紐で結んで止め、はみ出ているワラはハサミでカットします。根元の方は、縛りもカットもしません。富士子師匠の場合は、ワラが長く出ているようだったら、そのワラを使って縛ってしまいます。

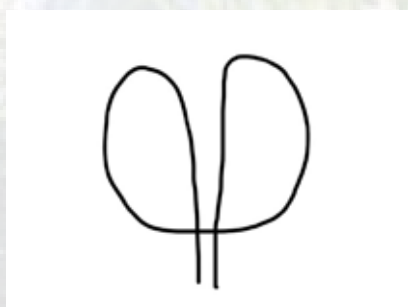
千代子師匠は根元を決めた後、その根元を回転させながらそのまま上に持って行って最後まで巻ききっていました。ワラを叩きすぎて柔らかくしすぎてしまうと、このやり方は難しいです。



編みワラはこの、通常タイプを 15 本× 2、途中でワラを 1 本加えたやや長く太めのものを 2 本× 2 作ります。

※布は幅 3 cm で、長さ 120cm × 15 ~ 16 本× 2 (普通用)、
長さ 130cm × 2 本× 2 (長く太めのもの)

スゲ縄がスムーズに引けるように、飛び出しているバリを切ります。



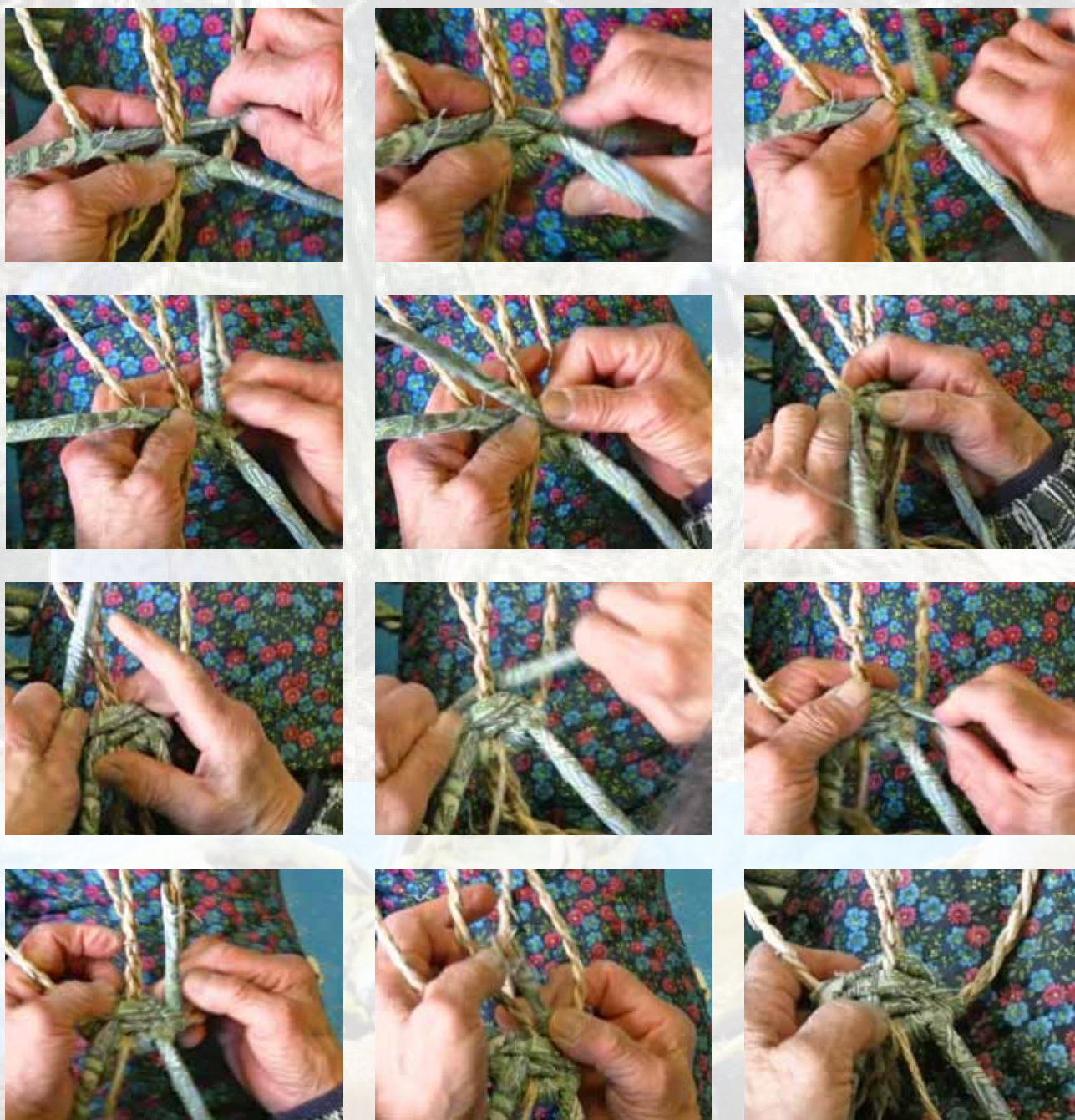
では、こんこん草履編みを開始します。まず図のように芯縄を形作って両足の親指にかけます。中芯 2 本に麻紐をかけてから、1 本目を編み込み始めます。こんこん草履編みの特徴として、まずは根元の部分をしっかりと芯縄に固定させてから、先端の方を編み進めていきます。



最初に編むのはつま先部分。中芯から根元が約 20cm 左に出るようにして置き、根元の方を手前の芯縄に 2 回巻き、編んだ部分に麻紐を引き寄せ、右指でしっかり抑えます。根元の方をもう一回巻き、中芯の裏側を通して、上に出します。



上に出した編みワラを、右側の外芯に、表から裏に巻きます。それを中芯の表側から左に持っていき、外芯の裏から表に巻いて、中芯の後ろに回し、ギュッと締めます。これが1本目。



2本目は編みワラの根元を右手にし、中芯の裏側に挟めてスタート。右外芯の表から裏に巻いて、中芯の表を通り左外芯の裏から表へ巻きます。

返した編みワラは中芯の裏を通り、右外芯の表から裏に巻いて中芯の間に挟めて押さえます。



3本目は編みワラの根元を左手にし、左中芯の上に編みワラがくるようにして、左側の根元を編んでいきます。左外芯を裏から表に巻いて、中芯2本を裏表交互に通します。最後は右外芯を裏から表へ巻きます。



3本目が編み終わりました。この、3本目の編み方を、左右交互にあと9本編みます。



4本目は編みワラの根元を右手にし、右中芯の上に編みワラがくるようにして、右側の根元を編んでいきます。右外芯を裏から表に巻いて、中芯2本を裏表交互に通します。最後は左外芯を裏から表へ巻きます。



ただし、12本目の最後は、外芯を裏から表へ巻く時に、巻いてきた編みワラの内側に挟みます。



ギュッと手前に押さえて、残しておいた編みワラを引っ張って、上下をひっくり返すと、12本足ガニの完成です。この上に木型を置いて甲の部分を編んでいきます。



ここで、千代子巨匠はひと工夫。木型の上で麻紐を常に張っておくために、足首に紐を巻いて結び、その輪と麻紐を結ぶことで張りをキープします。



甲の「覆い部分」を編みます。長く太目に作っておいた横芯に使う編みワラ4本のうちの2本を、麻紐の草履に近いところにぴったり合わせます。この時、奥の横芯は右麻紐の下に、手前の横芯は上にするようにして、互い違いに合わせます。

まず、奥の横芯（白色）を麻紐で折り曲げてから、右の一番上の編みワラから、木型の上に折り返します。手前の横芯（紅色）の上を通し、麻紐の下を通して押さえておきます。



次に、左の編みワラを折り返します。こちらは、手前の横芯（紅色）の下に通すので、麻紐で折り曲げてから編みワラを木型の上に折り返します。最後は麻紐の下を通し押さえます。



これを左右交互にやり、全ての編みワラを木型の上に折り返します。常に引っ張りながら編み、ひと編みしたらギュッと締めることを忘れずに。折り返し終わったら、甲の真ん中を上ギュッと押し上げて、麻糸を結びます。



全ての編みワラを下に引っ張ると、甲の先部分ができあがりです。木槌で、こんこん叩いて形を整えます。



(模様変わり失礼します) 甲の側部を編みます。下から一つ置きに編みワラを折り返して行って、甲の真ん中、麻紐を結んだところまで来たら、まずは麻紐を底の方にまわし、その上に一番上の編みワラを重ねて下ろします。こうすることで、麻紐が露出しないようにします。



甲の側部を編み続けます。常に引っ張り、押し詰めながら。



最後の一本を編んで2本の横芯だけになったら、その最後の一本と横芯2本とを三つ編みにして結んでおきます。



逆側も編んで、木槌でこんこん。



裏返して、残っている編みワラのうち、一番つま先に近いものから底を編みます。この編み方でこの向きだと、右の編みワラから。最初に通過する外側の芯縄にかかっていない場合は、その芯縄で底から表へひと周りさせてから次に編み進めます。



中の芯縄を交互に通し、左外の芯縄で折り返して、中の芯縄を交互に通します。巻き始めた右外の芯縄は巻かずにやめます。→?本来はひと巻きしたかったのだが、短かったからやめたのかも?



反対側に出ている編みワラを巻きます。こちらは、麻紐を一緒に倒して編みワラの後ろに隠した方です。麻紐を草履の先の方に引っ張り出してから、編みワラを編みます。



この編みワラは一往復以上巻くことができ、最後は中芯に挟めて終わりました。同様にして次々に編み込んでゆきます。



左右の三つ編みを解き、横芯ではない編みワラ2本を底に編み込みます。



左右の横芯2本だけの状態までになったら、一度、木型にはめて横芯を強く引っ張ります。すると、波打った横芯が均等に引っ張られ、甲側面の凸凹がなくなります。



横芯を編みます。上の横芯を底方向に折り、芯縄は順番的に内側から一回転させ、中芯縄に挟みます。つまり、これまでと同じ工程を辿ります。



編み終わったら、手前にギュッと引き締めると、甲部分の完成です！



最後に、土踏まず〜かかと部分を編みます。真ん中に根元を入れて、先端を芯縄の間を交互に通していきます。編みワラを追加する際は、常に真ん中に入れますが、この編み方では、水色の編みワラが終わった後、次の赤い編みワラをその延長方向に編んでいたのに、その次の水色の編みワラでは逆方向に編み始めました。これは、向かって右外側の芯縄に最後に巻く時、2回とも続けて、中身のワラがほとんどない、布きれだけ状態になってしまったので、このまま編み続けると締めた時に右外側の長さが短くなってしまいます。それをリカバリーするために向きを変えて右外芯から先に巻いたものと思われます。



一往復を1段と数えて、かかたを編み出してから9段目までは普通に編み、10段目から幅を狭くしていきます。このように、かかと用の編みワラは3本で済ませます。男性用など、予め大きなサイズと解っている場合は、編みワラを太く準備します。規格外の足サイズだと、4本使うこともあるそうです。

最後は手前にグッと引いて、こんこん草履の「編み作業」は終わります。



芯縄を引いていきます。交互に、少しずつ、底の形を意識しながら。



底裏面の、余った編みワラを切ります。切った編みワラに残っていた布きれを再利用。適度な大きさにカットして、つま先の底から出ている芯縄に巻きつけ、縄を隠し、残っている麻紐で結び、余分な部分をカットします。最後の木槌打ち、こんこんこん…



最後の仕上げに、はみ出ている邪魔な部分、縄の刺とかほつれた糸などを、ライターで軽く焼きます。これで、こんこん草履づくりの全行程は終了です。

お疲れ様でした。かなり頑張った感、達成感がある、ものづくりでした。

右上の画像は、左が千代子巨匠のつくったもの、右が富士子巨匠の作り中のものです。かなり、形が違います。本来、こんこん草履は奥様が家でコツコツ作っていたものですから、集落ごとで作り方がだいたい同じでも、家庭ごとに細部は異なります。この、家庭ごとの個性の差もこんこん草履の味わいの一つです。



こんこん草履用の木型は、「ねどふみの里」で一つ3,000円で販売しています。作業しやすくするために、軽い木が良いとのこと。富士子巨匠の特製木型は、麻紐を掛け挟めるためのフックがついています。



脚が悪い千代子巨匠は、手作りの座椅子を持って見えました。これは非売品だそうです。でも、売り物にしたら絶対売れると思うのですが…？



自分でなったスゲ縄は、強度が弱く、このように途中で切れてしまうこともあります。これが、草履の中で切れると完全にアウトですが、これはギリギリで持ち直しました。



麻紐をもう一本通すのを忘れていた場合は、「わっばさみ」という、竹を棒状に細工した道具を使い、麻紐を竹に挟んで草履の底に通し、往復させ、麻紐を通します。



最後に、希望者のみで藁たたき体験をしました。旧六合村根広地区では、今でも米作りは行っていないから、藁は近辺在住の親戚や知人から分けてもらっています。大きな石の上に藁を束ねて乗せて、藁束を回転させながら木槌（きづち）で叩きます。藁が柔らかくしなやかになればOKですので、やり過ぎないようにします。1束につき5～10分ぐらいで良いそうです。

